

Title	ポリグロシアにおける言語能力の現状調査：中国広西チワン族自治区南寧市上林県の事例
Author(s)	覃, 澍斌
Citation	
Issue Date	2022-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/17736
Rights	
Description	Supervisor:橋本 敬, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

修士論文

ポリグロシアにおける言語能力の現状調査：
中国広西チワン族自治区南寧市上林県の事例

覃 樹斌/QIN SHUBIN

主指導教員 橋本 敬

北陸先端科学技術大学院大学
先端科学技術研究科
(知識科学)
令和4年3月

Abstract

There is a multiple languages society in this world. To further classify 2 languages(Bilingual) societies, In 1959, Ferguson proposes Diglossia on top of Bilingualism. With the development of economic globalization and decolonization, the economic and political status of language has also changed. With the change of language status, language ability is also changing. Research was conducted on the language status of societies such as France genus Guadeloupe Island and Egypt. Many previous studies of Diglossia have observed the fact that as language policy progresses, the ability of one language increases and the ability of another language decreases from the perspective of society as a whole. From the results of the study, the language with high status increases the ability, and the language with low status decreases the ability. Therefore, it is hypothesized that 'Under the influence of language policy, changes in language ability are related to the status of language', which is the hypothesis of this study. However, there are also polygrussias with three or more languages in a multiple languages society, and it is necessary to study the linguistic competence of polygrussia in order to further understand the research of multilingual societies. Then, in order to clarify the current state of language ability of Polygrussia, this research will be conducted.

Key world:language ability,multilingual,diglossia,polyglossia

アブストラクト

この世界に多言語社会が存在している。2言語社会をさらに分類するために、1959年にファーガソンはバイリンガリズムの上で、ダイグロシアを提唱した。現在、経済のグローバル化や脱植民地化の進行などにつれて、言語の経済的と政治的な地位も変化する。言語の地位の変化とともに、言語話者の言語能力も変化する。例えば、ダイグロシアのフランス属のグアドループ島やエジプトなどの社会言語状況について研究が行われた。たくさんのダイグロシアについての先行研究により、言語政策が進むに伴って、社会全体の視点から、1つの言語の能力は高くなり、もう1つの言語の能力は低くなるという事実が観察できた。その結果によると、能力が高くなるのは地位が高い言語で、能力は低くなるのは地位が低い言語である。そこで、「言語政策の影響が受けられ、言語能力の変化は言語の地位と関係がある」と推測し、本研究の仮説になる。しかし、多言語社会とは3言語以上のポリグロシアも存在し、多言語社会の研究をさらに理解するため、ポリグロシアの言語能力も研究する必要がある。そして、ポリグロシアの言語能力の現状を解明するために、本研究を行う。

キーワード：言語能力、多言語社会、ダイグロシア、ポリグロシア

目次

第1章 序論.....	1
1.1 背景.....	1
1.1.1 2言語社会に対するの探究.....	1
1.1.2 2社会言語の事例.....	2
1.1.3 3言語以上の多言語社会について.....	2
1.1.4 本研究における用語の説明.....	3
1.2 本研究の目的.....	3
1.3 研究の方法.....	4
1.4 本論文の構成.....	4
第2章 関連研究.....	5
2.1 ダイグロシアについて.....	5
2.1.1 ファーガソンによりダイグロシアの定義.....	5
2.1.2 フィッシュマンによりダイグロシア概念の拡張.....	5
2.2 ダイグロシアを基づいての調査と研究の結果.....	6
2.2.1 香港の状況.....	6
2.2.2 グアドループ島の状況.....	7
2.2.3 中国雲南省羅平魯布革の状況.....	8
2.2.4 エジプトの状況.....	8
第3章 本研究の具体的な内容.....	9
3.1 先行研究の不足点.....	9
3.2 研究の目的.....	9
3.3 研究の意義.....	9
3.4 仮説.....	9
3.5 研究方法.....	10
3.5.1 調査方法に関する説明.....	10
3.5.2 Apparent-time studyを採用する理由.....	10
第4章 調査へ向ける準備.....	11
4.1 調査地の条件.....	11
4.2 上林県を選択した理由.....	11
4.2.1 広西チワン族自治区の特徴.....	11
4.2.2 南寧市の特徴.....	12
4.2.3 上林県の特徴.....	12
4.3 中国で「方言」という概念の説明.....	13
4.4 中国の「県」という行政区の説明.....	13
4.5 上林県概況.....	14
4.5.1 地理.....	14
4.5.2 人口.....	14
4.5.3 言語.....	15
第5章 調査について.....	16
本章では調査の具体的な内容を説明する。.....	16
5.1 「話す」と「聞く」のみ調査する理由.....	16

5.2	調査の実行.....	16
5.2.1	調査地点の選別.....	16
5.2.2	調査の協力者の選別(6人).....	16
5.2.3	調査対象の選別.....	17
第6章	調査の統計結果.....	18
	本章は調査から収集した資料の統計結果を述べる。.....	18
6.1	普通話.....	18
6.2	チワン語.....	19
6.3	新民話.....	20
6.4	白話.....	21
6.5	平話.....	22
6.6	三里官話.....	23
第7章	議論.....	24
7.1	統計結果のまとめ.....	24
7.2	低下する時期が異なるに対するの推測.....	25
第8章	結論.....	26
8.1	結論.....	26
8.2	気づいた点.....	26
	参考文献.....	27
	付録1：調査用紙(中国語).....	28
	付録2：調査用紙(日本語).....	29

第1章 序論

本章は読者がこの研究の基本的な考え方を理解しやすくするために、本研究の基本情報、すなわち、研究の背景・目的・研究の目的を達成するための方法・本論文の構成について述べる。

現在、さまざまな原因で言語地位が変化している。言語政策は一つの重要な原因になる。言語政策が進むに伴って、言語話者の言語能力も変化している。能力が高くなる言語も存在するし、能力が低くなる言語も存在する。本研究は社会言語学の視点から、言語の地位が言語能力へのについて現地調査を用いて実証的な知見を明らかにする。

1.1 背景

1.1.1 2言語社会に対するの探究

この世界では単一言語社会だけではなく、2言語以上の多言語社会も存在している。社会言語学の領域で、2言語社会はいつも「バイリンガリズム(Bilingualism)」と呼ばれる。しかし、2言語が存在する形式が異なる2言語社会がある。例えば、カナダのような単独の言語話者が2つの言語を把握する場合もあるし、中世の西ヨーロッパのような社会で2つの言語を条件によって使い分けの場合もある。そこで、社会言語学者はさらに2言語社会を分類するために、バイリンガリズムの上で、ファーガソン(1959)はダイグロシア(Diglossia)を提唱する。

ファーガソンはアラブ諸国の例からダイグロシアを説明した。アラブ諸国は、政府筋の布告や学校教育場など公的な意識を伝える場合でフスハーという言語変種を使用する。人々は家庭や友達との雑談など私的なことを交流する場合でアーンミーヤという言語変種を使用する。

ファーガソンにより、ダイグロシアとは「異なる場合(公的・私的)で2言語変種を使い分ける社会」である。具体的には、公的な場合で使用できる言語は高位変種(High Form)、私的な場合のみ使用する言語は低位変種(Low Form)と呼ばれる。

そして、フィッシュマンたちはパラグアイの研究結果から、ダイグロシアの概念を2言語に拡張した。パラグアイでは、公的な場合でスペイン語を使用し、私的な場合は原住民のグアラニー語を使用する。

すなわち、フィッシュマンにより、「異なる場合で2言語を使い分ける社会」もダイグロシアと呼ばれる。

ファーガソンとフィッシュマンたちにより、2言語社会は具体的な状況からダイグロシアとバイリンガリズムの2種類を分ける。そして、ダイグロシアとバイリンガリズムは「2言語を使用する社会」の共通点はあるが、異なる点もある。具体的には、バイリンガリズムは個人的なレベルの2言語併用社会で、ダイグロシアは社会的なレベルの2言語併用社会である。

1.1.2 2 社会言語の事例

多言語社会の言語状況の変化についてたくさんの研究を行った。

たとえば、マナガン(2003)の調査と研究により、フランス属の西インド諸島のグアドループ島(以下はグアドループ島)の社会言語状況はダイグロシアから単一言語社会に変化する傾向が存在する。

社会言語学領域で、グアドループ島を「ダイグロシア」と認識されていたが、マナガンの現地調査と研究により、「ダイグロシアは現在のグアドループ島の社会言語状況を記述できなくなる。そのかわりに、普遍的コードスイッチングを利用するバイリンガリズムのほうが適切である」を述べた。

脱植民地化が始まる時、グアドループ島は高位言語のフランス語と低位言語のフランス語をベースするクレオール語(以下はクレオール語)を2言語使い分けるダイグロシアであった。時間の推移に伴って、私的な場合でフランス語の使用は多くなり、一方、クレオール語の使用は少なくなる。クレオール語の使用量が減少するにつれて、現在の島民はクレオール語の熟練度も低くなる。そこで、クレオール語の会話の流暢性を確保するために、頻繁にフランス語のコードスイッチングを利用する。

マナガンは「グアドループ島の島民はクレオール語の熟練度が低下しているにつれて、これからこの島は単一言語社会に変化する傾向がある」と推測した。もう一つの例は香港である。

イギリスに植民されたから、英語は当地の高位言語になり、公的な場合で英語しか使用できない。中国へ帰還しても、英語の影響力は依然として深い。

板垣(2020)の研究によると、たくさんの人、特に若者たちは英語の経済的な地位と価値が広東語より高いと思い、私的な場合でも英語の使用は頻繁になる。一方、広東語の使用頻度は低くなり、広東語の熟練度はだんだん低くなる。

グアドループ島と香港の例から、高位言語のフランス語と英語の能力は各自の社会で高くなり、低位言語のクレオール語と広東語の能力は低くなる。

そこで、「言語能力の変化は言語の地位(高位・低位)と関係がある」という推測ができると思う。具体的には、「高位言語の能力は高くなり、低位言語の能力は低くなる」。

1.1.3 3 言語以上の多言語社会について

「多言語社会」とは2言語社会だけではなく、3言語以上の多言語社会も存在している。

プラット(1977)はマレーシアとシンガポールなど研究を通じて、2言語社会の「ダイグロシア」から、対応する多言語社会の「ポリグロシア」をまとめた。ラテン語で「ダイ」は「2」の意味で、「ポリ」は「複数、多」の意味である。言い換えると、「ポリグロシア(多言語社会)」は「ダイグロシア(2言語社会)」を包括する。

経済のグローバル化や脱植民地化などの原因で、ポリグロシアの言語能力も変化していると思う。そして、3言語以上の多言語社会には、低位言語より地位がさらに低い言語が存在する可能性があり、そのような言語の能力の変化はまだ明らかにしていない。

マダガスカル諸国のブルンジ共和国(以下はブルンジ)の事例から「低位言語より地位がさらに低い言語」について説明する。ブルンジはフランスに植民されるまえに、ルンジ語と原住民の言語を使い分けのダイグロシアであった。植民地時代では、フランス語は地位が一番高い高位言語になった。一方、ルンジ語と原住民の言語の地位も変化した。元の高位言語のルンジ語は低位言語になった。そして、原住民言語は低位言語のルンジ語より「低位言語さらに地位が低い言語」になった。

現在には経済のグローバル化や脱植民地化などの原因で、社会状況は変化している。発展するためにかく地域は現状に適応する言語政策を策定し、言語政策が進む伴って、住民の言語能力も変化している。

1.1.4 本研究における用語の説明

ダイグロシ(ポリグロシア) :

フィッシュマンの定義を使用する。フィッシュマンにより、ダイグロシアは「異なる場合で言語を使い分ける社会」および「複数の言語集団がある社会」ということである。

高位言語・低位言語 :

本研究の調査の対象になることばは言語変種(Language Variety)ではなく、言語(Language)として認識するため、公的な場合で使用する High Form は高位変種の代わりに高位言語を使用する。それに対して、私的な場合で使用する Low Form は低位変種の代わりに低位言語を使用する。

言語能力 :

本研究における「言語能力」とは「社会である言語を使用できる人数割合」のことになる。「言語能力が向上する」は「ある言語を使用できる人数割合が増加する」で、「言語能力が低下する」は「ある言語を使用できる人数割合が減少する」ということになる。

言語の能力 :

本研究における「言語の能力」とは、「話す能力」と「聞く能力」である。今回の研究は「書く」と「読む」を対象外になる。その理由は後で説明する。

言語地位 :

本研究における「言語地位」とは「政治・経済的な価値」ということである。そして、「地位が高い」は「高位」で、「地位が低い」は「低位」になる。

1.2 本研究の目的

本研究は社会言語学の視点から、「言語能力の変化と言語地位の関係」を明らかにすることを研究の目的にする。

そこで、言語地位の区別が存在する多言語社会で言語の変化あるいは変化の傾向を解明する現地調査を行う必要がある。

具体的には、ポリグロシアで低位言語より言語地位がさらに低い言語はどのような変化あるいは変化の傾向があるかを解明する。

1.3 研究の方法

本研究の目的を達成するために、現地調査で資料とデータを入手することは必要と思う。そのため、Apparent-time study を基づいて現地調査を行う。

Apparent-time study とは時間を見かけ研究で、社会の異なる年齢層の現状を比較する方法である。

本研究に対して、異なる年齢層のかく言語の把握する現状を比較し、ある言語を把握している人数割合の変化あるいはその傾向を観察する。

1.4 本論文の構成

第1章では、本研究の背景と研究の目的および方法を述べた。第2章では、ダイグロシアの関連研究について説明する。第3章では、本研究の具体的な内容を紹介する。第4章は現地調査へ向けの準備について紹介する。第5章は調査の中身を説明する。第6章では統計の結果についてを説明する。第7章は第6章の結果と現実の状況から考察をする。第8章議論を基づいて結論を出して、そして本研究を通じて気づいた点について論じる。

以上は本論文の構成である。

第2章 関連研究

本章は、最初に2言語社会のダイグロシアおよびダイグロシアについての関連研究と調査を紹介し、ダイグロシアの研究と調査から明らかにしたことをまとめる。そして、既存の関連研究と調査から明らかにしたことの問題点を探し出し、問題点を解決する重要性を述べる。最後に、予想した問題点を解決する方法について説明する。

2.1 ダイグロシアについて

2言語社会はいつも「バイリンガリズム」と呼ばれる。しかし、2言語社会にしても、2言語の存在する形式が異なる状況がある。そこで、2言語社会をさらに研究するために、新しい概念を提出する。

2.1.1 ファーガソンによりダイグロシアの定義

前述したように、2言語の存在する形式により、異なる2言語社会はさらに2言語社会を分類するために、ファーガソン(1959)は「バイリンガリズム」の上で、「ダイグロシア」を提唱する。

ファーガソンにより、ダイグロシアの定義は「場合により言語変種を使い分ける」社会である。具体的には、「公的な場合と私的な場合で異なる言語変種を使い分ける」ことである。

公的な場合とは、テレビとラジオの放送局や政府の文書など政府筋の公的な意志を伝える状況である。それに対して、私的な場合とは、家族や友達など日常生活でことばを話すときである。そして、公的な場合で使用する言語変種は「高位言語(High Form)」である。一方、私的な場合で使用する言語変種は「低位言語(Low Form)」と呼ばれる。

ファーガソンはアラブ諸国の例にして説明する。

アラブ諸国には「フスハー」と「アーンミーヤ」の2つのアラビア語の変種がある。フスハーはクルアーンや政府の文書などで使用し、「標準アラビア語」として認識されている。言い換えれば、フスハーはアラビア語圏の「高位言語」である。一方、アーンミーヤはアラブ諸国の人の日常生活には使用する言語、「低位言語」になる。

2.1.2 フィッシュマンによりダイグロシア概念の拡張

フィッシュマン(1967)はパラグアイの研究事例を通じて、ファーガソンの定義を2言語変種社会から拡張した。すなわち、「2言語社会を使い分け社会」もダイグロシアと呼ばれる。

具体的には、現在の南米のパラグアイには、公的な場合でスペイン語を使用し、私的な場合でグアラニー語を使用する。スペイン語はパラグアイの高位言語で、グアラニー語は低位言語である。

2.2 ダイグロシアを基づいての調査と研究の結果

現在、経済のグローバル化や脱植民地化などの進行につれて、各地のひとは自分の社会を発展するために、さまざまな言語政策を策定する。そくて、世界各地の社会言語状況は変化している。社会言語学者はグアドループ島、香港、中国雲南省羅平魯布革の布依族居住地およびエジプトのような2言語社会で調査と研究を行われた。調査と研究の結果から、言語の使用状況を通じて言語能力の変化を分かった。

それは、高位変言語の言語能力は高くなり、低位言語の言語能力は低くなるという事実が存在する。そこで、言語能力の変化は言語の地位と関係があると推測できる。具体的には、地位が高い言語の能力は高くなり、地位が低い言語の能力は低くなるということである。

2.2.1 香港の状況

植民地時代から、英語はリンガ・フランカ(世界共通語)の一つになったあと、イギリスの植民地で、原住民の言語の代わりに英語を通用語として使用する。そのため、英語を使用する場合は多くなり、人々の英語能力も高くなり、英語を把握している人も増加する。一方、英語が使用できる場合が多くなっているにつれて、原住民言語を使用できる場合が少なくなる。植民地の住民の原住民言語を把握する人も少なくなる。

イギリスに植民されていた香港は、英語が広東語の代わりに地域の高位言語になり、公的な場合で英語しか使えない。そのときの香港に高位変種は英語、低位変種は広東語のダイグロシア社会であった。

中国へ帰還しても、英語は経済的な領域での影響力が依然として高い。香港で言語の価値機能についての調査から、香港人の英語能力が高くなり、広東語能力が低くなる傾向が見える(表1)。

表1 香港での英語と広東語の機能価値の調査(板垣(2020)p.5-6「香港における英語という選択：広東語とのほざまで」東京通信大学紀要)

番号	設問	回答(%)	20代	30代	40代
1-f. あなたはどのぐらいの頻度で英語を使いますか？					
書き言葉	頻繁/時々		91/9	75/25	64/36
話し言葉	頻繁/時々		9/82	13/75	45/55
2-a. あなたはいつ英語を使いますか？					
公的場面	就業中 授業中		91	100	100
私的場面	オフの時 夢の中で		9	50	27
2-b. あなたはどこで英語を使いますか？					
公的場面	職場 教室		100	100	100
私的場面	家庭 カフェ		0	38	45
「家庭」を選ばなかった人は、家ではどんな言語を話しますか？ 広東語(福建語・普通話・英語との併用含む)			100	88	91

2-d. あなたは誰と英語を使いますか？				
公的場面	同僚 教師	91	88	100
私的場面	家族 友人 ペット	36	50	45
2-d. あなたはどんな話題で英語を使いますか？				
公的場面	仕事 勉強	100	100	100
私的場面	趣味/スポーツ 個人的なこと	18	50	36
2-e. あなたはどんな目的で英語を使いますか？				
コミュニケーション		73	75	100
リラックス		0	13	0
3-j英語は香港社会では1997年返還後も高く評価されている。		82	100	82
4-a. 病気の際はどちらの言語話者に助けを求めますか？				
英語話者		0	13	0
広東語話者		100	88	73
4-f. 個人的なことを話す時はどちらの言語話者に話しますか？				
英語話者		0	25	0
広東語話者		36	63	55

2.2.2 グアドループ島の状況

元イギリスの植民地だけではなく、元フランスの植民地にも同じような状況が存在している。

例えば、フランス属のグアドループ島は高位言語のフランス語と低位言語のクレオール語を組み合わせたダイグロシアであった。

世界的な経済の発展につれて、1970年代から島民はさらに政治と経済の権利を求めるために、法律でクレオール語にフランス語と同じ地位を授けた。

公的な場合でも私的な場合でもフランス語とクレオール語の使用は認める。2言語併用する人が多くなり、使用できる場合も多くなるが、グアドループ島でのフランス語の影響力が低下していない。世界範囲内でフランス語の経済と政治的な地位は島のクレオール語より高く、クレオール語を使用できても、たくさんの場合でフランス語を使用する意欲が強い。

研究者のマナガンは2003年の研究で、「島でたくさんの方はクレオール語を話すとき、クレオール語の流暢性を保証するため、よくコードスイッチングを利用する」を述べていた。

マナガンは「調査の結果により、ダイグロシアはすでにグアドループ島の社会言語状況を記述できなかったと思い、普遍的コードスイッチングを利用するバイリンガリズムのほうがグアドループ島の社会言語状況に適用する。そして、頻繁にコードスイッチングを利用することにつれて、グアドループ島は単一言語社会になる傾向がある」と述べていた。

マナガンの研究から、グアドループ島の言語能力の変化はフランス語の能力は高くなり、クレオール語の能力は低くなることを推測できる。

2.2.3 中国雲南省羅平魯布革の状況

新中国が成立したから、中国政府は漢民族の言語(漢語)を基づいて標準語を作り出して、通用語の地位を授けた。そして、経済と政治の目的により、雲南省の羅平魯布革の布依族居住地も含めていて、中国語標準語(普通話)は中国の各地に伝播した。

布依族の人に対して、一番重要な言語は本民族の布依語であった。しかし、中国の発展につれて、特に改革開放以降、中国語の経済と政治の国内と国際の影響力が広まる。布依族以外の学校へ通学したり、調査や研究などのため、本地へ来たりする人が多くなる。羅平魯布革は外との繋がりがだんだん強くなる。

香港とグアドループ島と同じ、羅平魯布革住民の言語能力状況も変化する。公的な場合は普通話を使用し、布依語は私的な場合しか使用しない。そのため、若者の布依語能力は低下していて、具体的な表現は語彙力が下がること。

そして、中国の普通話普及政策の進行につれて、羅平魯布革住民の普通話能力はだんだん高くなっている。

2.2.4 エジプトの状況

現在のエジプトでアラビア語の二つの変種の「フスハー」と「アーンミーヤ」を使用している。ハガグ(2019)の研究により、アラブの春以来、エジプトはさらに多くの人に政府の意思を伝えるために、公的な場合でアーンミーヤの使用は許可した。しかし、フスハーの値は低下していない。宗教儀式などの場合は依然としてフスハーしか使用できない。

エジプトは高位変種のフスハーおよび低位変種のアーンミーヤを使い分けのダイグロシアを維持している。

「フスハー」は標準アラビア語として認識している。カイロでたくさん的人是はフスハーの価値はアーンミーヤより高いと思い、アーンミーヤよりフスハーの使用は多いである。特に若い人は家でもフスハーを使用し、その熟練度も高くなり、アーンミーヤの能力は徐々に低下している。

第3章 本研究の具体的な内容

本章では本研究の具体的な内容について説明する。

まず、2言語社会の先行研究から気づいた問題とその問題を解決する必要性を述べる。そして、問題を乗り越えるための提案を紹介する。

3.1 先行研究の不足点

前述したように、2言語社会で時間の推移に伴って、政治・経済的な価値が高い言語の能力が高くなり、政治・経済的な価値が低い言語の能力は低くなるという変化の事実が存在している。

香港、グアドループ島、中国雲南省羅平魯布革とエジプトの事例だけでなく、スターリン時期の前ソ連の少数民族地域とスペインのカタロニア地域も同じような状況を観察できた。

しかし、多言語社会は2言語社会のダイグロシアだけではなく、3言語以上の多言語社会(以下はポリグロシア)も存在している。多言語社会をさらに理解するために、ポリグロシアの言語能力の現状を解明すべきと思う。そこで、本研究を実行する。

3.2 研究の目的

本研究の目的は、ポリグロシアの言語能力の現状を解明し、このような社会の言語能力の変化あるいは変化の傾向を明らかにする。

3.3 研究の意義

本研究は社会言語学の視点で、多言語社会の言語能力の研究についてさらに理解できて、実証的な知見を提出するという学術的意義がある。そして、言語状況が類似している社会の言語状況の研究に参考を提供するという社会的意義がある。

3.4 仮説

2言語社会の研究により「時間の推移に伴って、地位が高い高位言語の言語能力は向上し、地位が低い低位言語の言語能力は低下する」の事実が分かった。そこで、言語能力の変化と言語地位と関係があると推測する。

本研究は、ポリグロシアで「地位が高い言語の能力は高くなり、地位が低い言語の能力は低くなる」の仮説を提出する。

3.5 研究方法

Apparent-time study を基づいて、現地調査を行う。そして、調査から収集した資料を統計し、統計結果により考察と分析をする。

3.5.1 調査方法に関する説明

社会言語学の領域で、社会言語状況の調査について Real-time study と Apparent-time study の2つの方法がある。

Real-time study とは「真実の時間尺度の研究」のことで、特定の調査対象に数年間或いはさらに長い時間の状況を記録し、調査対象のかく時点の状況を比較する方法である。

Apparent-time study とは「見かけの時間研究」のことで、調査地の異なる年齢の人を調査対象として、現時点の状況を記録し、異なる年齢により状況を比較する方法である。

言い換えれば、Real-time study は個人的な視点から状況を観察する方法であ、Apparent-time study は社会的な視点から状況を観察する方法である。

3.5.2 Apparent-time study を採用する理由

まず、経済発展につれて、各地の繋がりが強くなり、コミュニケーションも頻繁になる。同じ場所で長時間に滞在する人が減少し、研究条件を満たす調査対象も少なくなる。

そして、本研究は個人の言語能力より社会全体の言語能力の現状を注目するため、Real-time study を断念し、Apparent-time study を採用する。

第4章 調査へ向ける準備

本章は調査の事前準備を説明する。まず、研究目的を達成するために調査地は満たすべき条件を述べる。そして、この調査地を選択した理由を説明して、調査地の基本情報を紹介する。

4.1 調査地の条件

本研究の目的を達成するために、調査地は以下の3つの条件を満たす必要がある：

- 3つ以上の言語を使用している
- それらの言語に地位の区別がある
- 言語能力は変化している事実が存在する

以上の条件から、中国の広西チワン族自治区南寧市上林県を選択した。

4.2 上林県を選択した理由

中国の広西チワン族自治区南寧市上林県を選択した理由は、前述にした必要条件以外に、地域の特徴も重要なことと思う。

広西チワン族自治区と南寧市および上林県は同じレベルの行政区より、自分の特徴がある。

4.2.1 広西チワン族自治区の特徴

中国で、新疆ウイグル族自治区、西蔵自治区、寧夏回族自治区、内モンゴル自治区と広西チワン族自治区の5つの少数民族の自治区がある。

少数民族自治区は、各自の独特な民族の文化と政策があり、少数民族の言語もきちんと保護されている。

中国は多民族国家で、中国国家统计局 2021 年の調査により、中国の人口は 91.11%が主体民族の漢民族で、残りの 8.89%は中国政府に認めている 55 個の少数民族である。

チワン族はもっとも人口が多い少数民族で、本民族の言語も使用している。中国の 85%以上のチワン族の人口は広西チワン族自治区に分布し、チワン族は広西チワン族自治区の人口の 30%以上を占めている。

広西チワン族自治区は多数の少数民族の集まり住んでいるところ以外、複数の中国政府に認めている方言区が被っている。

中国での中国語は 10 個の方言区がある(図 1)。それは官話方言区、贛方言区、晋方言区、客家方言区、呉方言区、閩方言区、湘方言区、徽方言区、粵方言区と平話方言区である。広西チワン族自治区には官話方言区、客家方言区、粵方言区と平話方言区の 4 つの方言区を被っている。



図1 漢語方言分の布図（中国社会科学院語言研究所（2012）「中国語言地図」 搜狐新聞網）

4.2.2 南寧市の特徴

広西チワン族自治区南寧市の所在地は上に述べた平話方言区である。平話を把握するのは南寧市およびその周辺の地域で生活している市民のみである。

そして、南寧市には多数民族の漢民族、多数の少数民族のチワン族、少数の少数民族のヤオ族やミャオ族などの人が生活している。中国各地から来られる人もたくさんいる。南寧市で使用している言語は多種多様である。

南寧市は広西チワン族自治区の省都として、使用している言語は広西チワン族自治区の全地域で影響力がある。

4.2.3 上林県の特徴

上林県政府ホームページにより、上林県は広西チワン族自治区の中部にあり、平話方言区、官話方言区、粵方言区と客家方言区の4つの方言区を被っている。そのため、上林県に通用している言語と方言の種類は中国語標準語と中国語方言および少数民族言語の3種類、6つの言がある。

南寧市統計局2020年の調査により、人口の分布は表2に示している。

表2 南寧市各地域の年齢ごとの人口比例(南寧市統計局「南寧市第七次全国人口普查主要数公報」南寧市統計局ウェブサイト)

単位：%

地区	占常住人口比重			
	0-14岁	15-59岁	60岁及以上	其中：65岁及以上
全 市	20.38	64.84	14.78	10.66
兴宁区	19.63	67.63	12.74	8.97
青秀区	18.22	68.18	13.60	9.39
江南区	20.18	68.27	11.55	8.00
西乡塘区	16.64	72.29	11.07	7.70
良庆区	21.34	68.49	10.17	7.18
邕宁区	21.89	63.07	15.04	11.14
武鸣区	18.06	64.02	17.92	13.12
隆安县	23.08	57.50	19.42	14.55
马山县	25.53	55.37	19.11	14.53
上林县	23.11	56.25	20.64	15.25
宾阳县	22.49	59.21	18.29	13.57
横 县	25.09	55.38	19.52	14.52

南寧市では上林県以外に、県という行政区は横県、隆安県、賓陽県と馬山県4つがあり、また青秀区、江南区、興寧区、西郷塘区、武鳴区、良慶区と邕寧区という7つの区という行政区がある。表2により、上林県の60歳以上の人口比例が一番高い地域で、調査に対してメリットがあると思う。

そして、黄(2010)により、上林県はチワン族文化に対して一番重要な神様の竜母の誕生地で、チワン語とチワン族文化の影響が深い。

また、李(2018)の研究によると、全広西チワン族自治区のチワン族の青年のチワン語を使用する意欲が低下していて、それに対して、普通話を使用する意欲が向上している。言語を使用する意欲の変化は言語能力と関係性が存在する。すなわち、上林県を含めて広西チワン族自治区のチワン族居住地に言語能力の変化の流れも存在している。

上に述べた特徴により、上林県を調査地として選択した。

4.3 中国で「方言」という概念の説明

中国語における「方言」の概念は日本語の「方言」と区別が存在する。

日本語の方言は、関西弁や金沢弁のような変種を知られて、標準語との区別は主に用語と発音から現れる。しかし、日本語の標準語を分かれば、方言はある程度まで理解できて、語彙レベルの誤解が存在する可能性があるが、大体の意味は通じている。一方、中国に定義されている「方言」は中国語標準語と完全に異なる可能性が存在している。

前述にしたように、中国には10個の方言区が分けている。中国語の標準語は官話方言区の変種を基づいて作り出した言語なので、中国語の標準語が分かれば、同じ官話方言区に属する変種、東北地方の東北弁や川渝地方の四川弁などある程度まで理解できる。

しかし、中国語標準語の普通話がないと、10個の方言区の人はお互いに言葉を理解できない状況がある。粵方言区の広東語は典型例である。中国語の標準語を分かっても広東語を理解できない程度の変種である。この状況はほかの方言区にも普遍的に存在する。

4.4 中国の「県」という行政区の説明

日本の行政区を分ける方法により、「県」とはProvinceの意味で、市町村を包括する普通地方公共団体、「都」「道」「府」と同じの行政区である。

中国でのProvinceという行政区は「省」「直轄市」「自治区」「特別行政区」の4つである。中国の「省」と「自治区」以下の行政区は「市」である。広西チワン族自治区の「南寧市」は石川県の「能美市」と同じレベルの行政区。「市」以下の行政区は「区」と「県」がある。「区」とは都市部のところで、「県」はその市に属する田舎のようなどころである。

「県」の下は、「鎮」と「郷」と「圩」がある。さらに下は「村」である。

すなわち、中国の「広西チワン族自治区南寧市上林県」は日本の「石川県能美市辰口町」と同じレベルのところである。

4.5 上林県概況

4.5.1 地理

広西チワン族自治区の西は雲南省、北は貴州省、湖南省、東は広東省と接し、南はトンキン湾に面する。南西はベトナムと国境を接する(図2)。上林県は自治区中南部の南寧盆地を流れる邕江兩岸の北東部に位置する(図3)。



図2 中国における広西チワン族自治区の位置(百度地図)



図3 上林県の位置(広西壮族自治区地図院「広西壮族自治区地図」広西壮族自治区資源庁ウェブサイト)

4.5.2 人口

南寧市統計局の集計により、上林県の0-14歳の人口は23.11%；15-59歳の人口は56.25%；60歳以上の人口は20.64%。

チワン族の人口は79.62%；漢民族の人口は13.87%；ほかの少数民族の人口は6.51%。

4.5.3 言語

上林県のに通用している言語は6つがある。

- 普通話：中国語標準語の通俗的な呼び方。中国で地位が一番高い通用語
- チワン語：チワン族の原生言語。広西チワン族自治区の通用語
- 白話：広東語の変種。広西チワン族自治区の粵方言区に使用する方言
- 平話：南寧市の原生言語。南寧市とその周辺のところに使用する方言
- 新民話：客家語の変種。広西チワン族自治区の客家方言区に使用する方言
- 三里官話：官話の変種。広西チワン族自治区の官話方言区に使用する方言

上林県にヤオ族やミャオ族などのチワン族以外の少数民族もいるが、長時間で漢民族とチワン族の影響を受けられ、大部分の人は中国語とチワン語を使用する。ヤオ語やミャオ語などの少数民族言語は上林県に通用していない。

第5章 調査について

本章では調査の具体的な内容を説明する。

5.1 「話す」と「聞く」のみ調査する理由

言語の能力は4つがある。それは「話す」、「聞く」、「書く」と「読む」である。今回の研究は言語能力の「話す」と「聞く」のみ調査する。

その理由は以下の3つがある：

- 1) 今回の研究にかかわる6つの言語と方言は正書法の機能の文字を持ちの中国語標準語の普通話とチワン語の2つのみ。そして、古典のチワン語は文字があるが、チワン族を研究する専門家以外に理解できる人はない。現在に使用しているチワン語の文字は中国政府が1950年代にラテン語に基づいて作成した文字である。学界の専門家、チワン族の事務に関する政府の役員およびチワン族民族学校以外に把握する人は殆どない
- 2) 同じ粵方言区に属する白話は、香港と澳門特別行政区で、漢字に基づいての正書法が通用しているが、広西チワン族自治区に通用していない。
- 3) 中国語の方言に定義される平話・新民話・三里官話の使用している地域は、古代中国から漢民族に支配され、古典韓国語と古典日本語のように、独自の話し言葉があるが、書き言葉は中国語と同じ。現在にも変わらない
上述したように理由で、本研究は「話す」と「聞く」のみ研究する。

5.2 調査の実行

5.2.1 調査地点の選別

調査は上林県の大豊鎮・白圩鎮・三里鎮・巷賢郷・澄泰郷・塘紅郷6つの地域で実行する。研究目的を達成するために、調査地は以下5つの条件を満たすべきである。

- 1) 年齢層の分布は上林県全般的な状況と大体同じ
- 2) 地域に極端的な個性は存在しない
- 3) 大部分の住民は長期的に本地で生活している
- 4) 上林県範囲内の交流は保有している
- 5) 上に述べた6つの言語を使用している人が存在する

5.2.2 調査の協力者の選別(6人)

研究目的を達成するために、今回の調査は協力者が必要である。調査の協力者は以下4つの条件を満たすべきである。

- 1) 調査地域の状況を熟知している
- 2) 調査地域の人に用心されない
- 3) 6つの言語と方言を理解できる
- 4) 直接的に調査対象を連絡できる

5.2.3 調査対象の選別

研究目的を達成するために、調査対象は以下の3つ条件を満たすべきである。

- 1) 生まれながら長期的に上林県で生活している
- 2) できる限り同じ家族の人
- 3) できる限り一般民衆、政府の役員などではない人

5.3 調査の中身

今回の調査は調査用紙を750部を配布し、750部全部回収した。750部の中に723部は有効である。

調査方法は協力者たちが約束した調査対象に当面アンケートを行う。

研究目的を達成するために、調査対象が所属する年齢層と言語能力の情報を収集すべきである。

言語の能力は、6つの言語の「話す能力」と「聞く能力」について調査する。

言語の話す能力は4つの選択肢がある(どちらの言語にしても同じ)：

- 流暢に話せる
- 簡単な言葉が話せる
- 流暢に話せない
- 全然話せない

言語の聞く能力：は4つの選択肢がある(どちらの言語にしても同じ)：

- 全部わかる
- 簡単な言葉がわかる
- 殆どわからない
- 全然わからない

第6章 調査の統計結果

本章は調査から収集した資料の統計結果を述べる。

6.1 普通話

年齢ごとの普通話の話す能力の統計結果を図4に示す。

図4より：

19歳以下と20-39歳の有意差あった ($P < .001$) ;

20-39歳と40-59歳の有意差あった ($P = 0.016$) ;

40-59歳と60歳以上の有意差あった ($P < .001$)。

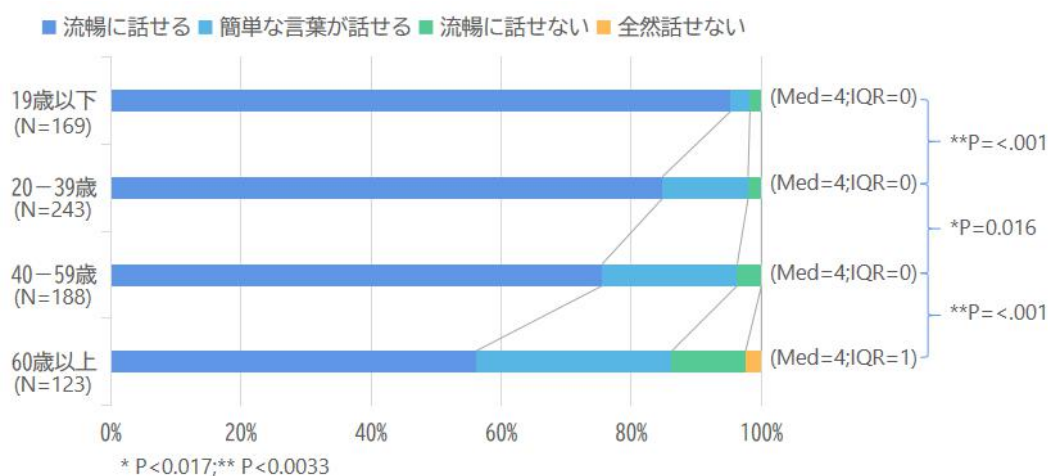


図4 年齢により普通話の話す能力の統計結果

年齢ごとの普通話の聞く能力の統計結果を図5に示す。

図5より：

19歳以下と20-39歳の有意差あった ($P < .001$)

20-39歳と40-59歳の有意差なかった ($P = 0.399$)

40-59歳と60歳以上の有意差あった ($P < .001$)。

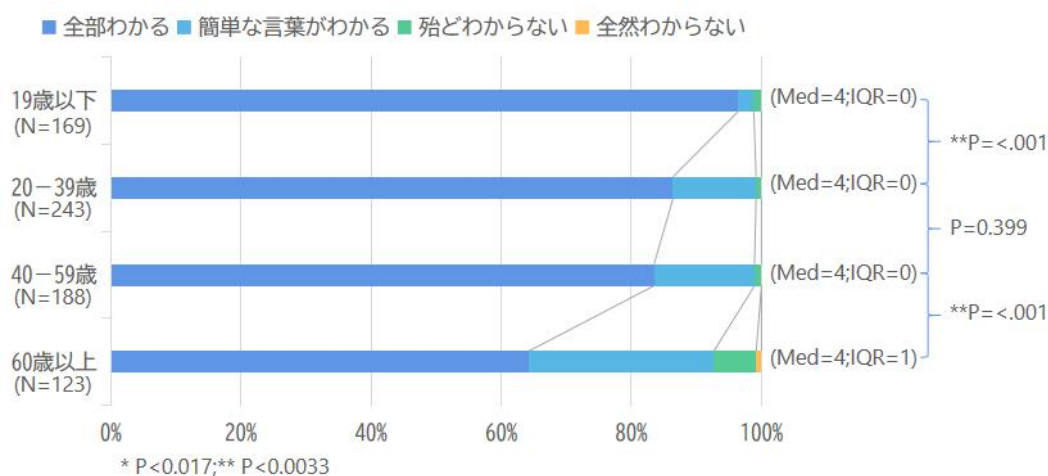


図5 年齢により普通話の聞く能力の統計結果

6.2 チワン語

年齢ごとのチワン語の話す能力の統計結果を図6に示す。

図6より：

19歳以下と20-39歳の有意差あった($P < .001$)；

20-39歳と40-59歳の有意差あった($P = 0.005$)；

40-59歳と60歳以上の有意差なかった($P = 0.08$)。

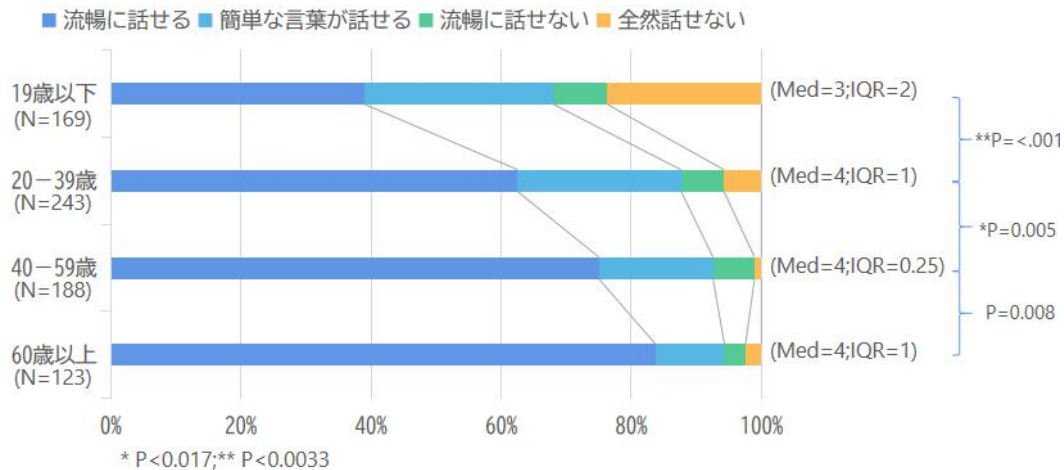


図6 年齢によりチワン語の話す能力の統計結果

年齢ごとのチワン語の聞く能力の統計結果を図7に示す。

図7より：

19歳以下と20-39歳の有意差あった($P < .001$)；

20-39歳と40-59歳の有意差あった($P = 0.007$)；

40-59歳と60歳以上の有意差なかった($P = 0.064$)。

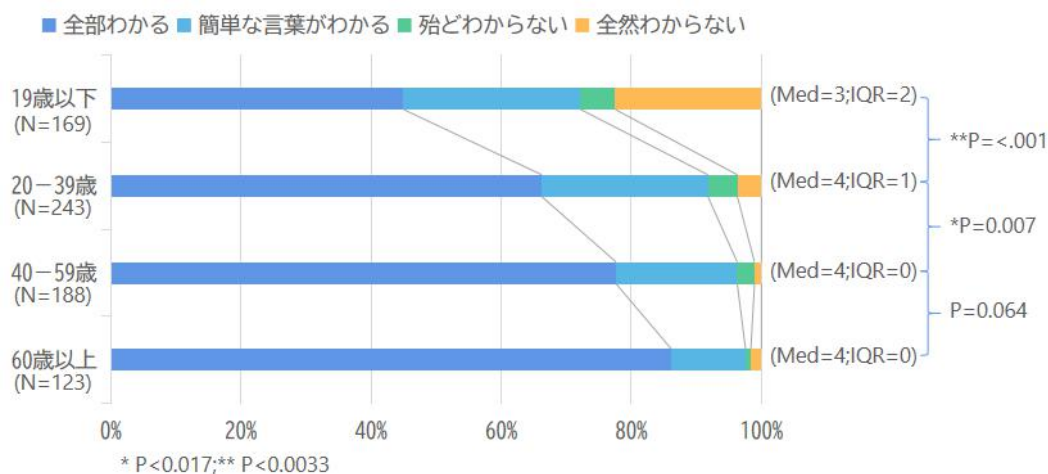


図7 年齢によりチワン語の聞く能力の統計結果

6.3 新話

年齢ごとの新話の話す能力の統計結果を図8に示す。

図8より：

- 19歳以下と20-39歳の有意差あった ($P < .001$) ;
- 20-39歳と40-59歳の有意差なかった ($P = 0.315$) ;
- 40-59歳と60歳以上の有意差なかった ($P = 0.248$)。

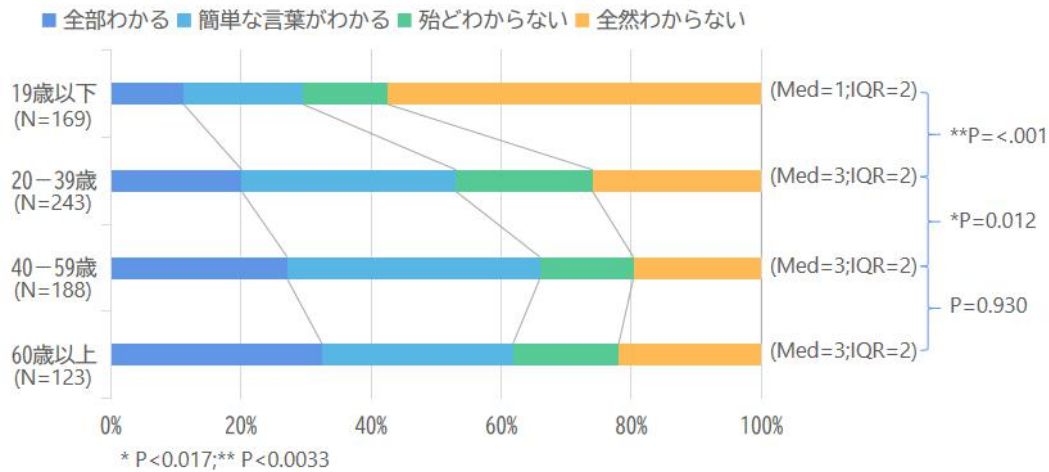


図8 年齢により新話の話す能力の統計結果

年齢ごとの新話の聞く能力の統計結果を図9に示す。

図9より：

- 19歳以下と20-39歳の有意差あった ($P < .001$) ;
- 20-39歳と40-59歳の有意差あった ($P = 0.012$) ;
- 40-59歳と60歳以上の有意差なかった ($P = 0.93$)。

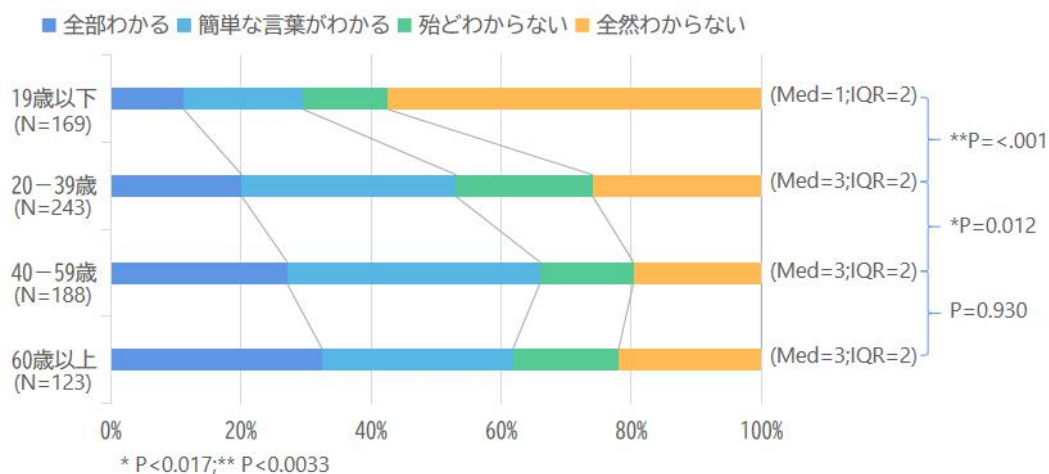


図9 年齢により新話の聞く能力の統計結果

6.4 白話

年齢ごとの白話の話す能力の統計結果を図 10 に示す。

図 10 より：

19 歳以下と 20-39 歳の有意差あった ($P < .001$) ；

20-39 歳と 40-59 歳の有意差なかった ($P = 0.340$) ；

40-59 歳と 60 歳以上の有意差あった ($P = 0.013$)。

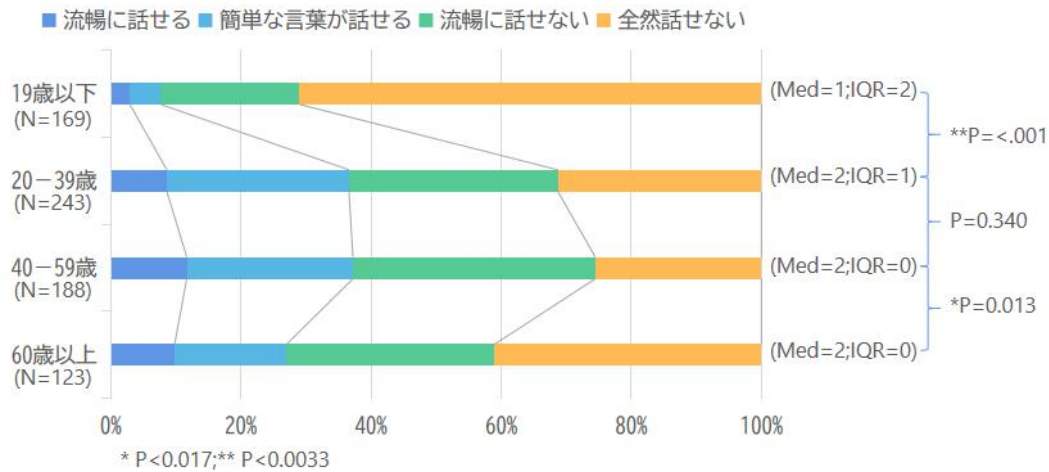


図 10 年齢により白話の話す能力の統計結果

年齢ごとの白話の聞く能力の統計結果を図 11 に示す。

図 11 より

19 歳以下と 20-39 歳の有意差あった ($P < .001$) ；

20-39 歳と 40-59 歳の有意差なかった ($P = 0.047$) ；

40-59 歳と 60 歳以上の有意差あった ($P = 0.004$)。

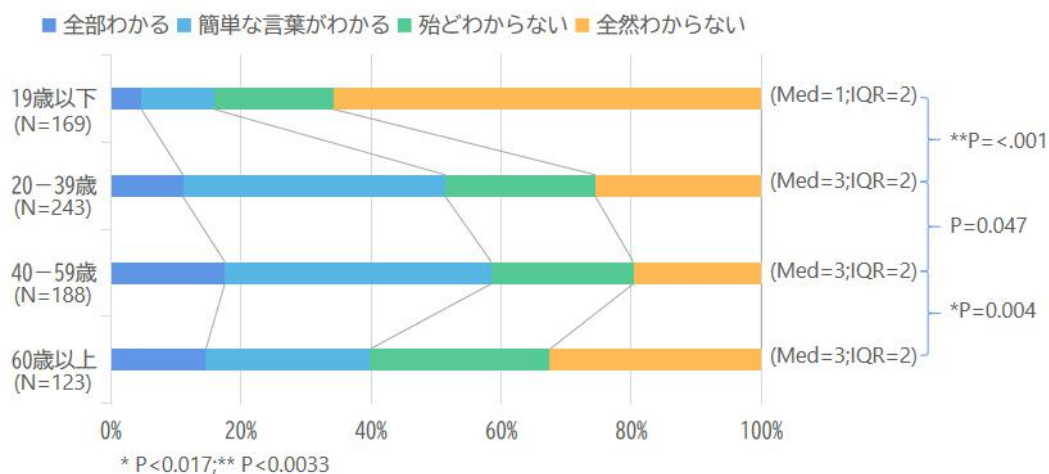


図 11 年齢により白話の聞く能力の統計結果

6.5 平話

年齢ごとの平話の話す能力の統計結果を図 12 に示す。

表 12 より

19 歳以下と 20-39 歳の有意差あった ($P < .001$) ;

20-39 歳と 40-59 歳の有意差なかった ($P = 0.595$) ;

40-59 歳と 60 歳以上の有意差なかった ($P = 0.630$)。

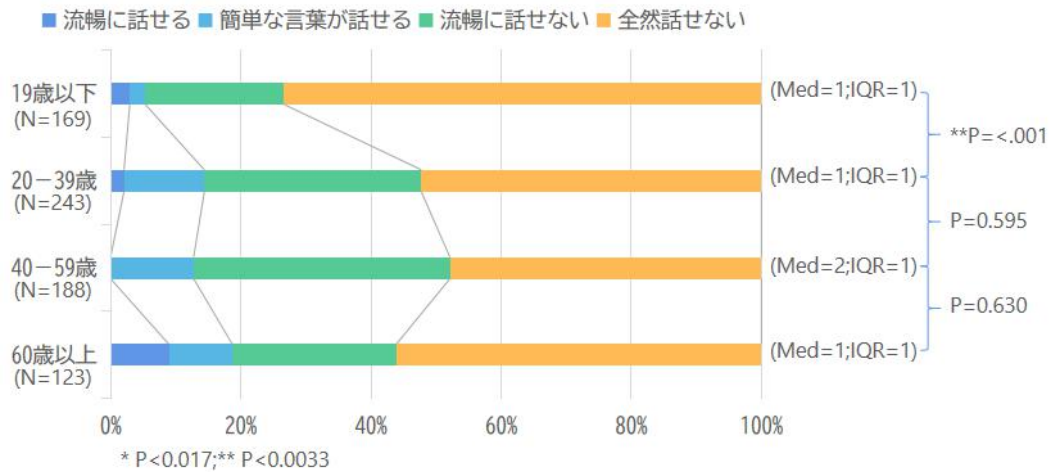


図 12 年齢により平話の話す能力の統計結果

年齢ごとの平話の聞く能力の統計結果を図 13 に示す。

図 13 より :

19 歳以下と 20-39 歳の有意差あった ($P < .001$) ;

20-39 歳と 40-59 歳の有意差なかった ($P = 0.345$) ;

40-59 歳と 60 歳以上の有意差なかった ($P = 0.450$)。

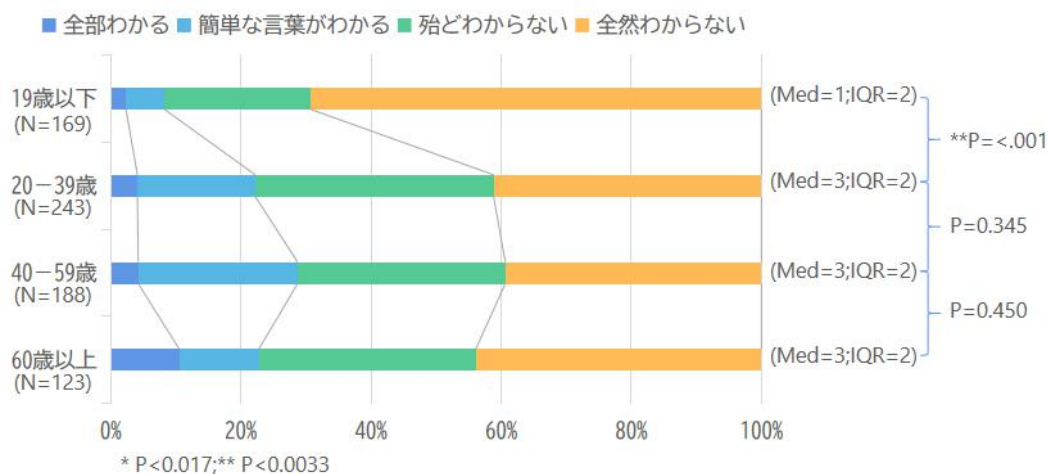


図 13 年齢により平話の聞く能力の統計結果

6.6 三里官話

年齢ごとの三里官話の話す能力の統計結果を図 14 に示す。

図 14 より：

19 歳以下と 20-39 歳の有意差あった ($P < .001$) ；

20-39 歳と 40-59 歳の有意差あった ($P = 0.008$) ；

40-59 歳と 60 歳以上の有意差なかった ($P = 0.885$)。

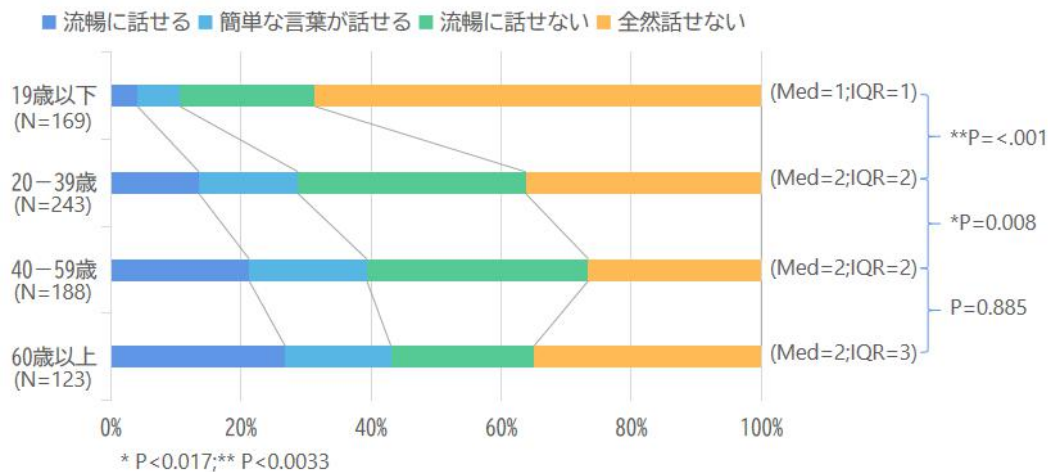


図 14 年齢により三里官話の話す能力の統計結果

年齢ごとの三里官話の聞く能力の統計結果を図 15 に示す。

図 15 より：

19 歳以下と 20-39 歳の有意差あった ($P < .001$) ；

20-39 歳と 40-59 歳の有意差あった ($P < .001$) ；

40-59 歳と 60 歳以上の有意差なかった ($P = 0.219$)。

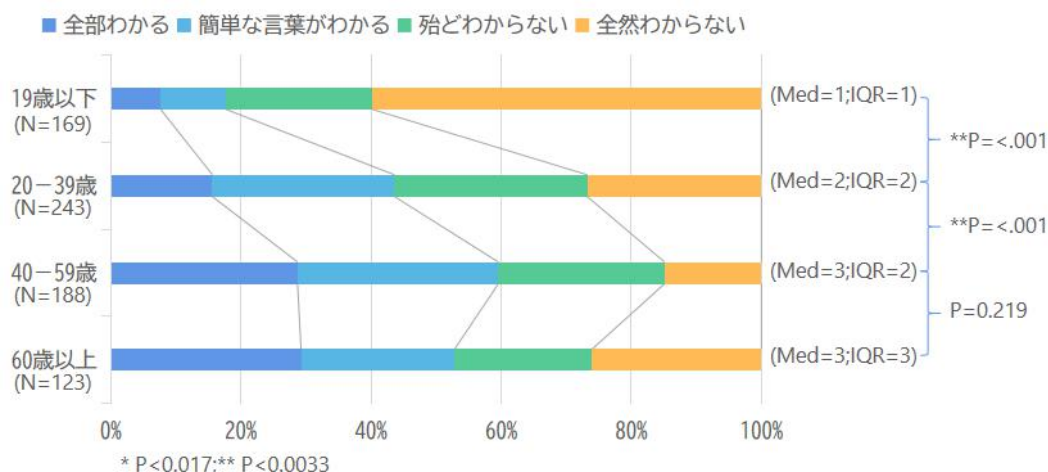


図 15 年齢により三里官話の聞く能力の統計結果

第7章 議論

本章は、第6章で示した調査の統計結果をまとめた上で、統計結果について議論する。また、実験の結果がどのような結論を導くのかについて述べる。

7.1 統計結果のまとめ

本研究の仮説は「地位が高い言語の能力は高くなり、地位が低い言語の能力は低くなる」を検証した(表3)。

表3 調査の結果と仮説の関係 (○は推測と合う；△は推測と一部に合う)

言語	能力	変化の傾向	仮説
普通話	話す能力	向上	○
	聞く能力	向上	○
チワン語	話す能力	低下	△
	聞く能力	低下	△
新民話	話す能力	低下	△
	聞く能力	低下	△
白話	話す能力	低下	△
	聞く能力	低下	△
平話	話す能力	低下	△
	聞く能力	低下	△
三里官話	話す能力	低下	△
	聞く能力	低下	△

本研究に調査した言語地位により分類すると、以下の3種類に分けられる。

- 普通話：国家レベル高位言語
- チワン語：国家レベル低位言語
- 新民話・白話・平話・三里官話：地域レベル低位言語

統計結果により、国家レベル高位言語の普通話は60歳以上の年齢層から変化が始まり、能力が向上する傾向が存在する。

一方、チワン語・新民話・白話・平話・三里官話、5つの言語と方言は低下する傾向は存在しているが、変化の時期を異なっている。

チワン語の能力の低下は普通話の能力が向上する時期から一定の時間以降、変化し始める。新民話・白話・平話・三里官話の低下はチワン語の能力の低下する時期から一定の時間以降、変化し始める。

高位言語と低位言語の変化する傾向のみを考えれば、上林県という6言語のポリグロシアにも「高位言語の言語能力は向上し、低位言語の言語能力が低下する」傾向がある。この点は2言語のダイグロシアと同じ。

しかし、複数の低位言語の変化は一致ではない。この点は6言語を使い分けのポリグロシアと2言語を使い分けのダイグロシアの異なる点と思う。

7.2 低下する時期が異なるに対するの推測

陳と李(2005)により、中華人民共和国が成立する前に、中国大陸には強力な中央政府は存在していなかった。そのゆえ、中国語標準語(普通話)という通用語も存在していない。したがって、広西に生活している人は大部分はチワン族であり、チワン語は地方政府の公用語であった。その時の広西省は、高位言語のチワン語と低位言語の新民話・白話・平話・三里官話を使い分ける5言語のポリグロシアであった。新民話・白話・平話・三里官話は私的な場合のみ使用されているが、チワン語は公的な場合でも私的な場合でも使用できる。

中華人民共和国が成立したから、全国を統一に支配したり、計画経済を遂行したりするために、中国語標準語(普通話)を作り出した。そして、通用語として普及する。この時期から、普通話高位言語になった。

しかし、向上にしても低下にしても、言語能力の変化は時間が必要。そこで、普通話を普及し始めて、能力が向上するとき、チワン語は顕著的な変化がない。一定の時間以降、普通話は高位言語として、チワン語の公的な場合での使用を取り替わって、チワン語はだんだん私的な場合しか使用できない言語になる。一方、新民話・白話・平話・三里官話はもともと私的な場合のみ使用する低位言語なので、公的な場合で使用する言語の変化は影響を及ぼさない。

中国の社会と経済の発展につれて、普通話の政治・経済的な地位はだんだん高くなる。私的な場合で普通話の使用も頻繁になり、普通話は低位言語の機能を取り替わった。新民話・白話・平話・三里官話の言語能力も低下する。

第8章 結論

第8章では、本研究の全体の振り返りとしてまとめた上で、結論を論じる。最後に、本研究に気づいた点について述べる。

8.1 結論

本研究の調査と統計結果により、ポリグロシアでは「時間の推移に伴って、地位が高い高位言語の言語能力は向上して、地位が低い低位言語の言語能力は低下する」の仮説を検証した。

3言語以上のポリグロシアで、新しい高位言語(本研究は普通話)が現れた後、最初に取り替わるのは古い高位言語(本研究はチワン語)の公的な場合の使用。しかし、古い高位言語はまだ私的な場合での使用できるので、最初に言語能力は顕著的な変化がない。一定の時間以降、変化する傾向が存在する。

一方、もとの低位言語(本研究は新民話・白話・平話・三里官話)は私的な場合しか使用できないので、公的な場合の言語使用の変化から影響を及ぼさない。しかし、新しい高位言語の地位が変化するに伴いもとの低位言語も変化し始める。

そこで、3言語以上のポリグロシアに対する研究は2言語のダイグロシアに対する研究と異なる方法で行うべきである。

8.2 気づいた点

今回の研究はいくつかの点を気づいた。

- (1) 今回の研究は「話す」と「聞く」のみ調査した。「書く」と「読む」を調査すると、異なる結果が出る可能性も存在する。そして、言語能力の4つの領域により派生した「陳述力」、「聴解力」、「文章力」と「読解力」のような「技能」の調査は面白いことを見えると思う。
- (2) 現在は情報化時代で、教育を受けたり、マスメディアを利用したりすることも言語の能力に影響を与える今回の研究における調査は Apparent-time study の方法で言語能力の変化を見たが、Real-time study を使用すると面白い結果を出す可能性も存在すると思う。
- (3) 現地の調査で、確かにたくさんの人が普通話を聞いたらきちんとわかるが、話すときは完全に標準的な普通話を話せる人はあまり多くない。たくさんの人が話せるのは「南普」という南寧弁の普通話である。しかし、標準普通話の使用とのコミュニケーションは障害がない。このような新しい言語変種の使用も研究する価値がある。

さらに社会言語学や多言語社会などについての研究を貢献したいなら、本研究の不足点を意識するのは重要なことと思う。ポリグロシアをよりよく理解するために、追加の調査と研究を実行する必要がある。

参考文献

- Ferguson, C. A, Diglossia. *word*, 15(2), pp. 325-340(1959)
- Fishman, J, Bilingualism with and without diglossia; diglossia with and without bilingualism, *Journal of Social Issues*, 23(2), pp. 29-38(1967)
- Managan. K, Diglossia reconsidered: Language choice and code-switching in Guadeloupean voluntary organizations, *Proceedings of the Eleventh Annual Symposium about Language and Society-Austin*, pp. 251-261(2003)
- 三浦 信孝, 糟谷 啓介(2002), 『言語帝国主義とは何か』, 藤原書店
- 藤井 久美子(2004), 『近現代中国における言語政策: 文字改革を中心に』, 三元社
- 陳 於華(2005), 『中国地域社会と標準語: 南中国を中心に』, 三元社
- 陳 海倫, 李 連進 (2005), 『広西語言文字使用問題調査与研究』, 広西教育出版社
- 謝 俊英(2006), 「中国不同民族群体对普通話的態度假異分析」, 『語言文字応用(3)』, 教育部語言文字応用研究所, pp. 20-25
- ルイ. ジャンカルヴェ (著) (2006), 砂野 (訳), 『言語学と植民主義: ことば喰い小論』, 三元社
- 中嶋 茂雄(2008), 『少数言語の視点から: カタルーニャ語を軸に』, 現代書館
- ルイ. ジャンカルヴェ (著) (2010), 砂野・今井等 (訳), 『言語戦争と言語政策』, 三元社
- Norman M. Bradburn, Seymour Sudman, Brian Wansink (著) (2011) 趙 鋒 (訳), 『問卷設計手冊』, 重慶大学出版社
- 林 超(2015), 「広西南寧語言使用状況調査分析: 以青秀区長壩村与江南区白沙村為例」, 雲南師範大学
- Yuksel. Ekinici (著) (2017), 于 洪彦 (訳), 『問卷設計』, 格致出版社
- 李 金陽(2018), 「广西壮族青少年語言使用情況調査与分析」, 『民族翻譯』(3), pp. 72-78
- Floyd J. Fowler (著) (2019), 蔣 逸民等 (訳), 『調査問卷的設計与評価』, 重慶大学出版社
- 李 琼 (2019), 『西安市城中村語言使用状況調査研究』, 人民出版社
- 板垣 直美(2020), 「香港における英語という選択: 広東語とのほぎまで」, 『東京通信大学紀要』(3), pp. 1-16
- 「広西チワン族自治区」(2021), <https://map.baidu.com/search>, 百度地図, (参照 2021-12-20)
- 「広西壮族自治区地図」(2020), <http://www.gismap.com.cn/webmap/index>, 広西チワン族自治区地図院, (参照 2021-12-20)
- 「上林県概況」(2015), <http://www.shanglin.gov.cn/slkg/slkg/t520471.html>, 上林県人民政府, (参照 2021-12-15)
- 「南寧市第七次全国人口普查主要数掘公報」(2020), <http://tj.nanning.gov.cn/tjsj/tjgb/t4762640.html>, 南寧市統計局, (参照 2021-12-20)

付録 1：調査用紙(中国語)

上林县多语言状况调查问卷

一. 受访者基本信息(请圈出相对应的选项)【单选】

年龄： ①19岁及以下 ②20-39岁 ③40-59岁 ④60-79岁

二. 各语言陈述能力(请圈出相对应的选项)【单选】

A. 请问您会普通话吗？

①能够流利的使用 ②能够使用简单的语句 ③不能够流利使用 ④完全不会

B. 请问您会壮话吗？

①能够流利的使用 ②能够使用简单的语句 ③不能够流利使用 ④完全不会

C. 请问您会新民话吗？

①能够流利的使用 ②能够使用简单的语句 ③不能够流利使用 ④完全不会

D. 请问您会白话吗？

①能够流利的使用 ②能够使用简单的语句 ③不能够流利使用 ④完全不会

E. 请问您会平话吗？

①能够流利的使用 ②能够使用简单的语句 ③不能够流利使用 ④完全不会

F. 请问您会三里官话吗？

①能够流利的使用 ②能够使用简单的语句 ③不能够流利使用 ④完全不会

三. 各语听解能力(请圈出相对应的选项)【单选】

A. 请问您能听懂普通话吗？

①能完全听懂 ②能够听懂简单的语句 ③基本听不懂 ④完全听不懂

B. 请问您能听懂壮话吗？

①能完全听懂 ②能够听懂简单的语句 ③基本听不懂 ④完全听不懂

C. 请问您能听懂新民话吗？

①能完全听懂 ②能够听懂简单的语句 ③基本听不懂 ④完全听不懂

D. 请问您能听懂白话吗？

①能完全听懂 ②能够听懂简单的语句 ③基本听不懂 ④完全听不懂

E. 请问您能听懂平话吗？

①能完全听懂 ②能够听懂简单的语句 ③基本听不懂 ④完全听不懂

F. 请问您能听懂三里官话吗？

①能完全听懂 ②能够听懂简单的语句 ③基本听不懂 ④完全听不懂

付録2：調査用紙(日本語)

上林县多言語状況調査用紙

一. 調査対象基本情報(対応のところにマークしてください)【単一選択】

年齢： ①19歳以下 ②20-39歳 ③40-59歳 ④60-79歳

二. 個人言語陳述力(対応のところにマークしてください)【単一選択】

A. 普通話ができるか？

①流暢に話せる ②簡単な言葉が話せる ③流暢に話せない ④全然話せない

B. チワン語ができるか？

①流暢に話せる ②簡単な言葉が話せる ③流暢に話せない ④全然話せない

C. 新民話ができるか？

①流暢に話せる ②簡単な言葉が話せる ③流暢に話せない ④全然話せない

D. 白話が：できるか？

①流暢に話せる ②簡単な言葉が話せる ③流暢に話せない ④全然話せない

E. 平語ができるか？

①流暢に話せる ②簡単な言葉が話せる ③流暢に話せない ④全然話せない

F. 三里官話ができるか？

①流暢に話せる ②簡単な言葉が話せる ③流暢に話せない ④全然話せない

三. 個人言語聴解力(対応のところにマークしてください)【単一選択】

A. 普通話を聞いてわかるか？

①全部わかる ②簡単な言葉がわかる ③殆どわからない ④全然わからない

B. チワン語を聞いてわかるか？

①全部わかる ②簡単な言葉がわかる ③殆どわからない ④全然わからない

C. 新民話を聞いてわかるか？

①全部わかる ②簡単な言葉がわかる ③殆どわからない ④全然わからない

D. 白話を聞いてわかるか？

①全部わかる ②簡単な言葉がわかる ③殆どわからない ④全然わからない

E. 平語を聞いてわかるか？

①全部わかる ②簡単な言葉がわかる ③殆どわからない ④全然わからない

F. 三里官話を聞いてわかるか？

①全部わかる ②簡単な言葉がわかる ③殆どわからない ④全然わからない